

アサガオ

牧 幸 男

現在、私達が使っている暦を、旧暦と比較すると季節感が少し違う。その例として8月は、上旬に「立秋」が訪れる。立秋は暦の上では秋が近いことを予知するが、これからが残暑の厳しくなる時期であるので、おかしいと思うが、詮索は不要である。実体験の気候と、暦の感覚が違うのはやむを得ないことである。旧暦の月の別名は「葉月」である。この意味は『奥義抄』(1144)では「木の葉のもみぢて落ちつるゆゑに、葉落ち月といふを誤れり」、また『至宝抄』(1627)に「初月と書く。また・・・初来^{はつき}といふ。雁の初めて来るころなり」とあり、ハッキリしたことは不明である。一般に葉月は「植物が葉を落す月」の意味らしい。

アサガオは秋の花、旧暦7月の七夕頃の花と言われ、秋の七草の含まれるよう、旧暦の8月に相応しい花である。旧暦で祝う七夕祭は涼しさが少し感じられる頃、空が澄み星空観察がふさわしくなる頃である。2014～2025の間8月の新暦月(8月1日)は8月25日～9月22日である。



朝顔市で有名な入谷の「朝顔祭」は、信玄寺の鬼子母神境内とその付近の歩道で開催される朝顔祭りである。この行事は、江戸時代の嘉永(1848～1854)頃から行われていたが戦時中中止、戦後間もない1948(昭和23年)に、地区活性化の一環として再開され、現在に続いている歴史ある行事である。期日は例年7月6日～8日の3日間行われているが、新暦では、無理があると思うのだが詮索はよそう。当初は御徒町付近に住む武士が栽培した朝顔を、入谷の植木屋達が精力的に協力するようになり、「朝顔市」がスタートしたのである。

また、この花が七夕に関係ある花と言われるのは、別名を牽牛花^{けんぎゅうか}と呼ぶことがあるからだ。七夕祭りは、天の川によって隔てられた織女星(ベガ)と牽牛星(アルタイル)が1年に1度だけ逢える「七夕の契り伝説」が由来である。1年に1回しか逢えない逢瀬のことを、紀貫之は1年1夜だけとは言え、無限に続く二人の出会いを羨んで次の様な短歌を残している。

ひととせに 夜と思へど 七夕の あいみむ秋の かぎりなきかな

と詠んでいる。忙しい現代に生きる私達は、このようなゆったりとした気持ちになれるだろうか。この恋の物語を現代風に置き換えると、この星の距離は15.5光年である。光の速さは電波の速さと同じだから、インターネットでメール交換をしても到着するのに15年半を要してしまう。更に、返事が帰ってくるまで31年もかかると思うと星の恋は気長な楽しみと思うのである。

牽牛花、即ちアサガオは中国南部からヒマラヤ地方原産のヒルガオ科の一年草で、日本で発達した栽培種である。この渡来した奈良時代末期(一説には平安時代という説がある。)に遣唐使がその種子を薬として持ち帰ったものである。記録上では『和名抄』(929～930)にアサガオ、『古今和歌集』(913)に牽牛子^{けんぎし}の名の記載がある。現在は、記録上では『古今要覧稿』(1821～1842)に「延喜(901～923)の昔、

呉の船舶載せて来り。」とあるので、平安時代に渡来したのであらうとの説が有力である。

茎はつる性で逆毛があり、左巻きで他物にまつわり、長さ3m以上に成長する。葉は互生し長い柄があり、夏、葉腋に大きな花を咲かせる。この花、早朝に開き午前中にしぼんでしまうはかない命の花だ。アサガオの渡来当初の目的は、薬用主体であったが、花の見事さから次第に観賞用になった。このため多くの人々に好まれ、様々な品種改良が盛んに行われ、花の大小や色、斑入りの葉などが様々な種類が生まれている。特に、江戸時代には品種改良が最盛期を迎え、新品種が次々と生まれた。

朝顔の特徴は、種皮が硬く「硬実種皮」と呼ばれて、水分を種子の内部に浸透させない構造になっている。このため、収穫した種子をそのまま植えても発芽しにくく、発芽させるためには「芽切り」といって種に傷をつける処理が必要になっている。更に、朝顔は種子でしか増えない一年草で、系統の維持も種子で行わなければならないことである。一方、珍奇な品種の多くは、雄しべや雌しべが花びらに変化してしまい種子ができない。変種は特別操作や突然変異に限られている。そのため、過去には黄色や黒の朝顔も存在したことが記録に残っているのみである。

佐倉市の「国立民族博物館 くらしの植物園」や九州大学大学院薬学府附属薬用植物園にはアサガオ2,000種以上の系統が保存されている。

比較的高温を好む植物で短日性のため、低気温の地域では、品種は少ないが、「西洋朝顔」と呼ばれ、種子には庭園用の「多花性品種」が多く生まれている。鮮紅色中輪の「スカーレット・オハラ」や近縁種のマルバアサガオは比較的に早くから欧米で栽培されている。また、「ヘブンリー・ブルー」などの青色朝顔は近縁の別種である。

『万葉集』(629～759)にはアサガオの短歌が登場しているが、渡来時期からもアサガオではなく、キキョウ(桔梗)が正しいとされている。何故植物名が変わったか、詳しいことは省略するがキキョウ、ムクゲ、アサガオの三者の渡来時期よるもので、時代の流れであらうとここでは説明しておく。古くから親しまれてきただけに、多くの歌が残っている。

見をりの 露わすられぬ あさがほの はなのさかりは 過やしぬらん
朝まだき 涼き程の 朝顔は 藍など濃くて あれなどおもふ
朝顔に 釣瓶とられて 貰ひ水 加賀の千代女
朝顔や おもいを逃げ ごとしぼむ 日野草城

源氏物語
長塚節

植物名は、朝だけが鑑賞できるので朝顔となったと牧野富太郎博士は述べ、漢名を牽牛花や牽牛子をあてている。しかし、一般には「朝顔」の漢字を多く使っている。日本にだけ通用する表現で、先人達は朝に咲く美しい花だから朝顔とし、「顔」の意味は、「朝の容かお花はな」と考えた。「容すがた」とは容姿のこと、美しい姿、即ち美人を表し、本来の意味は「朝の美人」とか「朝の美女」と考えたのである。別名には牽牛花、牽牛子、黒牛、草金鈴などがある。牛に関する植物名は、農民が牛を牽きつれて薬である朝顔の種子を交換したことから起こったと言われている。



アサガオ種子（牽牛子）

学名は *Pharbitis nil* で、属名は様々な色がある意、種小名は藍色の意で、原種は藍色であるが様々な色の花を咲かせる植物となる。

薬用は、生薬名を「牽牛子」と呼び、乾燥した種子を砕いて服用する。通常緩下剤として使うが、分量を多くすると峻下剤となるので、専門家の指導を受けることが大切だ。仮に、間違えて口に入れてしまったとき、種子をそのまま飲み込んでしまった場合、症状が出ないことがある。症状が数日間現れなければ、便としてそのまま排出される。噛み砕いた場合はすぐ病院に行くべきである。経口摂取は30分程度で口渴が現れ、次いで体のふらつき、悪心、嘔吐、倦怠感、眠気、瞳孔散大、意識混濁、興奮、幻覚、麻痺、頻脈、けいれん、呼吸困難、昏睡などが現れる。非常に危険な種子である。経口致死量は4～5g程度と言われている。

花言葉は「はかない恋」「固い絆」「愛情」である。

